

尾関周二著『21世紀の変革思想に向けて

—環境・農・デジタルの視点から—』について

河野勝彦

本稿は、2021年7月31日に行われた関西唯物論研究会例会での尾関周二氏の著書『21世紀の変革思想に向けて——環境・農・デジタルの視点から——』⁽¹⁾についての私の疑問点を、例会当日になされた尾関氏の応答を踏まえてまとめたものである。

本書は尾関氏のこれまでの研究（ヘーゲル、マルクス、言語・コミュニケーション論、環境論、共生論など）をもとにした21世紀の社会変革の見取り図を描くことを狙いとしていて、広く深い内容になっており、評者の能力の及ばない部分も多く、私の挙げた疑問点は、尾関氏からすれば、見当違いの批評になる箇所もあったと思われ、それにもかかわらず丁寧な応答をしていただいたことにこの場を借りて感謝したい。

本書は、ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』や内閣府第5期科学技術基本計画「Society 5.0」で述べられている人類史の発展段階である「狩猟社会」(Society 1.0)、「農耕社会」(Society 2.0)、「工業社会」(Society 3.0)、「情報社会」(Society 4.0)に続く、「未来社会」(Society 5.0=IoT (モノのインターネット) やAI (人工知能などの最新テクノロジーを活用した社会))を踏まえたうえで、「地球環境問題、農業問題、AI・ITなどのデジタル問題の視点を統合しつつ、社会変革へ向けての新たな21世紀の社会理論を構築しようとする意欲を触発すること」(18)を狙いとしている。

その際著者は、マルクスの思想について、「従来の「生産力史観」や「経済成長史観」に代えて、マルクスが重視した「人間と自然の物質代謝」概念を発展させて「物質代謝史観」を提起」(21)する。コロナ禍の発生は、「資本主義システムや近現代文明による「物質代謝の亀裂・攪乱」に由来する」(21)ことから、物質代謝史観の適切性が示されていると考えるからである。こうして尾関氏は、21世紀の変革思想の構築を「マルクスに依拠しながらマルクスを超えるというスタンス」(26)でもって展開して行こうとするのである。

以下、本書の内容に対して私が違和感、疑問をもった点を示していきたい。

1. 環境思想の哲学的論争——人間中心主義か自然中心主義か——について

尾関氏は、20世紀後半展開された環境倫理学における論争：「自然保護の根拠を、自然それ自体に「内在的な価値」(或いは「固有の価値」)があるから守るのか、或いは、人間にとっての価値があるから守るのかという論争」(39)——自然中心主義か人間中心主義かの論争について、次のように自らの立場を述べている。

私は人間の価値付与を離れて自然に価値はないという立場ではなく、生命的自然、生命圏には価値が満ち溢れているという立場を取りたいと思う。しかし、それは、自然中心主義者たちが主張するような「自然の権利」を根拠づける「自然の内在的価値」(また「自然の固有の価値」)ではないと言える。自然中心主義者が「自然の権利」に類比する人権は社会的性格を持つものだからである。(64)

尾関氏は、人間を離れて生命的自然には価値が満ち溢れているが、その価値は人間社会が認める「人間の尊厳」価値に類比して考えられる「権利」として位置づけられることはできないということ、なぜなら「生命圏には、食物連鎖というお互いの主体を否定しあうことによるのみ自己保存が可能であるような関係性が厳然としてあるからである」(64-65)と言う。

私は、尾関氏のこの立場の大筋を認めたい。自然界、生命圏には、人間の価値づけとは独立して価値が満ち溢れているということ、しかしこの価値は人間にその価値の擁護を義務づける道徳的あるいは法的価値ではないことを認める。しかしその上で、人間には生命圏の価値を守る道徳的あるいは法的義務があるのではないかと、我々人間社会はその方向へと進むべきではないかと考えている。

確かに生命圏には、「食物連鎖というお互いの主体を否定しあう」関係があるが、しかしまた互いに共生しあう関係もある。バクテリアやウィルスを含めて、互いに否定し合うのではなく共生システムがあるのではないかと。例えば人体を構成する細胞の数でいえば、人間本来の細胞が約 37 兆個であるのに対し、バクテリアの数は 100 兆個以上いると言われている。実際、著者は、本書においても、95~96 頁でモンゴメリの『土と文明』や『土と内蔵』に触れて、「ヒトと微生物生態系との共生が重要な課題である」と述べている。

個体レベルで言えば、人間は動物を食べるが動物が人間を食べることはまずない。動物同士が食物連鎖で否定し合っているというのは、その通りであるが、そこに倫理的な問題はない。なぜなら倫理の次元は人間において初めて存在し、動物相互の間に倫理の次元はないからである。

カントでは、理性的能力を備えた人間だけが道徳的行為者(moral agents)であるとともに、道徳的配慮の対象である道徳的行為の受け手(moral patients)であったが、クリスティーヌ・コースガードは、動物も道徳的行為の受け手でありうることを、確かに動物は道徳的行為主体ではなく、人間も含めた動物相互の間で道徳的義務を持つものではないが、苦痛を避けたいという欲求を持っているので、人間は動物を道徳的に配慮の対象にしなければならないと論じる。私たちが人間相互の間に配慮や「認知を求める際に私たちが要求するのは、生得的な欲求、利害、愛情の対象である私たちの生得的な関心に、他者が最大限尊重しなければならない価値の重要性が付与されることである。苦痛を避けたいという欲求が分かりやすい例であるが、生得的な関心の多くは、私たちの動物性に由来するのであって、理性に由来するものではない」⁽²⁾。すなわち、私たちが相互に道徳的に配慮し合っているのは、相手の理性能力ではなく、相手の生得的な欲求能力に対してであり、その点では生得的な欲求能力をもつ動物についても同様でなければならないのである。

「動物の権利」が唱えられるのは、かつての奴隷と同様に、飼育動物が人間の私的所有財産とされ、人間の利用の対象とされている現実を変革する必要があるとの立場からである。もちろん、飼育動物や野生の動物は私的所有物ではないだけではなく、共同所有(コモンズ)でもなく、誰のものでもないことが想定されている。

尾関氏は、「人類は生命圏の他の生物との関係性における生命主体として生命圏の一員であるとともに、自然と人間社会との関係性における人間社会の社会的主体を構成する一員でもある。この人間存在の二重性を見落とすべきではないであろう」(65)と言い、例会当日

の応答では、「動物の世界に倫理や道徳はないが、「欲求能力」をもっている以上、欲求対象は価値的なものであり、私はこの価値を人間的価値と区別して「生命的価値」と呼んだ。動物の世界は無価値な世界ではなく、生命的価値に富む世界でもある。ただ、この価値は人間の「倫理」的行為や「道徳」的行為を直接引き起こす人間的価値ではなく、ここで働くのは、生命体への共感能力であると思う。そして、この共感能力が他の動物への「倫理」的配慮に似た感情を生み出すのではないかと思う」と述べられたが、21世紀の社会は少なくとも動物たちを道徳的共同体の一員として見なす方向に進んでいくべきではないかと思えるのである。私はまだそこまでは踏み込めていないので大きな声で言う資格はないのであるが、今、動物食を控える人が増えており、あまりにも残酷な動物たちの置かれている状況を変えることが求められているのである。

2. マルクスの「人間主義と自然主義の統一」について

尾関氏は、「若きマルクスの「人間主義と自然主義の統一」の理念と晩期マルクスにおける「人間と自然の物質代謝」概念の深化をつなぐことで、環境思想と社会理論を結びつける新たな可能性を探る」(72)として、『資本論』での「人間と自然の物質代謝」論と『経済学・哲学草稿』での「人間主義と自然主義の統一」の理念とを内的に結びつけたものであると見るのであるが、どうであろうか。尾関氏がそう見るのは、『経哲草稿』における「自然」を「人間の非有機的身体」と捉えるマルクスの次の見方が『資本論』の「人間と自然の物質代謝」とつながっていると見るからである。

自然、すなわち、それ自体が人間の肉体(Körper)でない限りでの自然は、人間の非有機的身体(*der unorganische Leib*)である。人間が自然によって生きるということは、すなわち、自然は、人間が死なないためには、それとの不断の〔交流〕過程のなかにとどまらねばならないところの、人間の身体(Leib)であるということなのである。人間の肉体的および精神的な生活が自然と連関しているということは、自然が自然自身と連関(*die Natur mit sich selbst zusammenhängt*)していること以外のなにごとをも意味しはしない。というのは、人間は自然の一部だからである。(マルクス『経済学・哲学草稿』城塚登・田中吉六訳、岩波文庫、pp.94-95)(78)

尾関氏は、自然を「人間の非有機的身体」として捉えるマルクスの言葉に、「人間－自然関係の内的・生命的関係性が語られている」(78)と見て、この人間－自然関係の見方が『資本論』でのマルクスの「人間と自然との物質代謝」と共振すると捉えるとともに、これはそのまま人間主義と自然主義の統一であると捉えるのである。しかしそうであろうか。

『経哲草稿』「疎外された労働」の項での「非有機的身体としての自然」について、「人間－自然関係の内的・生命的関係性が語られている。……後のマルクスの「自然との物質代謝」と共振する」(78)とあり、これについては評者も同意見であるが、これが「マルクスによる二元論克服」「人間主義と自然主義の統一」の理念と繋がっているということには、疑義がある。『経哲草稿』「私有財産と共産主義」での「人間主義＝自然主義」のマルクスの考えは、自然を「非有機的身体としての自然」と見る立場と議論の次元が異なっているからである。自然を人間の非有機的身体と捉える「人間と自然の内的一体性」は、「人間主義と

自然主義の統一」と捉えられる「自然と人間の一体化（自然史と歴史の一体化）」とは議論の次元が異なるように思えるのである。

マルクスは、『経哲草稿』「私有財産と共産主義」において、人間と自然の関係について、次のように何度も「自然の人間化（社会化）」と「人間的な自然の人間化」を語っている。

たんに五感だけではなく、いわゆる精神的諸感覚、実践的諸感覚（意志、愛など）、一言でいえば、人間的感覚、諸感覚の人間性は、感覚の対象の現存によって、人間化された自然によって、はじめて生成するからである。五感の形成はいままでの全世界史の一つの労作である。（『経哲草稿』 p.140）（80）

すべての歴史は、「人間」が感性的意識の対象となり、そして「人間としての人間」の欲求が〔普通の〕欲求となるための準備の歴史である。歴史そのものが自然史の、人間への自然の生成の、現実的な一部分である。（『経哲草稿』 p.143）（80）

それゆえ、歴史の全運動は、共産主義を現実的に生み出す行為——その経験的現存を産出する行為——であるとともに、共産主義の思考する意識にとっては、共産主義の生成を概念的に把握し意識する運動でもある。（『経哲草稿』 p.131）

この共産主義は完成した自然主義として＝人間主義（vollendeter Naturalismus=Humanismus）であり、完成した人間主義として＝自然主義（vollendeter Humanismus=Naturalismus）である。それは人間と自然とのあいだの、また人間と人間とのあいだの抗争の真実の解決であり、現実的存在と本質との、対象化と自己確認との、自由と必然との、個と類とのあいだの争いの真の解決である。（『経哲草稿』 p.131）（81）

社会そのものが人間を人間として生産するのと同じように、社会は人間によって生産されている。活動と享受とは、その内容からみても現存の仕方からみても社会的であり、社会的活動および社会的享受である。自然の人間の本質は、社会的人間にとってはじめて現存する。なぜなら、ここにはじめて自然は、人間にとって、人間との紐帯として、他の人間にたいする彼の現存として、また彼にたいする他の人間の現存として、同様に人間的現実の生活基盤として、現存するからであり、ここにはじめて自然は人間自身の人間的あり方の基礎として現存するからである。ここにはじめて人間の自然的なあり方が、彼の人間的なあり方となっており、自然が彼にとって人間となっているのである。それゆえ、社会は、人間と自然との完成された本質統一であり、自然の真の復活であり、人間の貫徹された自然主義であり、また自然の貫徹された人間主義である。」（『経哲草稿』 p.133）（82）

ここで言われている「自然」は、動物的な自然、粗野な自然ではなく、人間的な自然であり、野生の自然は貶められている。進化論は、自然が人間を目指して進化すると唱えている

のではなく、それぞれの種がそれぞれに進化すると考えている。それぞれの種がそれぞれに洗練されていくと考えているのではないか。その点で、このマルクスの立場は、人間中心主義だと言える。次の文章は、このことを示している。対象としての自然は人間自身とされるのである。

社会のなかにある人間にとって、対象的な現実が人間的な本質諸力(Wesenskräfte)の現実として、人間的な現実として、またそれゆえに人間固有の本質諸力の現実として生成することによって、あらゆる対象が人間にとって人間自身の対象化として、人間の個性を確証し実現している諸対象として、人間の諸対象として生成する。すなわち、人間自身が対象となるのである。(『経哲草稿』 pp.138-139)

「あらゆる対象が人間にとって人間自身の対象化として、……人間の諸対象として生成する。すなわち、人間自身が対象となるのである」とは、まさに人間中心主義以外のなにもないのである。

テッド・ベントンは、「マルクスの人間論と動物論——人間主義か自然主義か——」において、マルクスのこの歴史観が「人間の非有機的身体」としての自然のメタファーの内容と両立しないし、人間とその生存条件としての自然的環境との「物質代謝」の恒久的必要性という主張と両立しないし、人間がその中で自らの活動を形作り方向付ける条件と限界を永遠に設定するところの、人間活動から独立な、複雑な因果的秩序としての自然の現実性と両立しない^③と指摘しているが、その通りであると思う。

3. 物質代謝史観への疑問

本書におけるもっとも画期的な提言は、「物質代謝史観」である。尾関氏は、「ロシアの「農業共同体」は「社会再生の拠点」として高く評価でき……資本主義的工業社会を経なくとも、ロシアの「共産主義的発展の出発点」になりうる」(109)という晩期マルクスにおける「ザスーリチへの手紙」を重視し、ここにはマルクスが、複線的な歴史観とともに「農業や共同体の積極的な意義」(109)を考えていたことが示されていると捉える。

そして、ハラリ『サピエンス全史』や日本政府「Society 5.0」などの歴史観の提起に対応して、歴史観の再考が不可欠であり、教条的な「唯物史観(史的唯物論)」の吟味が求められるとして、単線的歴史観、「土台」「下部構造」と言われた経済的なものへの還元主義的歴史観は否定されるべきであろう(111-112)と言う。

従来の唯物史観では、「生産力(その核は「労働の生産力」)と生産関係の矛盾とその克服によって歴史発展がなされるとしてきた」(113)が、生産力と自然生態系との矛盾がもつ重大な意味は無視されてきた。これが、ソ連東欧での深刻な環境問題を惹き起こした理由であると批判する。

こうして尾関氏は、「生産力を歴史発展の究極的な動因とする歴史観」＝「生産力史観」(115)を退け、マルクス『資本論』のなかの「人間と自然の物質代謝」概念に注目して、「生産力ー生産関係」カテゴリーの歴史認識における重要な意義はあるが、それをも含むさらに包括的な基礎的カテゴリーとして「人間と自然の物質代謝」概念を歴史発展の基底に位置付

けて人類史と未来社会を捉えるカテゴリーと考えることが、「人新世」が語られる 21 世紀の歴史観として重要である」(116)として、「人間と自然の物質代謝」を基礎におく歴史観＝「物質代謝史観」を対置する。

尾関氏は、「生産力史観」に対する「物質代謝史観」の優位性を、生活手段の生産過程だけではなく、労働力の再生産過程である生活過程をも含むことができ、「歴史を動かす動因は、環境史的な視点とともに、生産力と物質代謝との関係、生産関係と物質代謝との関係にもあると考えることができるようになる」(119)と言って、歴史を次のように物質代謝様式の変化として見ようとする。

物質代謝史観からの人類史の概観(120-124)

- 「人間と自然の物質代謝の様式」(物質代謝様式)に基づいた人類史の諸段階
- (1)狩猟採集時代：移動、狩られるヒトから狩るヒトへ、平等主義、血縁共同体
 - (2)1 万年前の「農業革命」：定住、生産力の増大、文明の誕生、階級社会、自然循環
 - (3)300 年前の「産業（工業）革命」：科学革命と国民国家の形成、人間と自然の物質代謝の攪乱・亀裂が引き起こされる、共同体の解体、経済的支配隷属、形式的平等
 - (4)エコロジー革命＝コンミュン主義革命：人間と自然の物質代謝の健全なエコロジカルなあり方の実現。人間主義と自然主義の合致。

これは、唯物史観の従来の生産様式の人類史の概観（アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的、共産主義的）とは対応しながらもその視角が異なっている。

この尾関氏の物質代謝史観をどう考えるかであるが、そもそも「歴史観」というのは、歴史を動かす原動力を何に見るかということである。その視点からすると、確かに人類史の各段階に固有の物質代謝様式が生まれたといえるが、その転換を推し進めたのは果たして物質代謝様式であると言えるのであろうか。斎藤幸平氏も「具体的な人間と自然の物質代謝は、その媒介である労働がどのようにして社会的に組織されるかに応じて大きく異なってくる」^④と言っているように、各物質代謝様式はそれぞれの転換の結果なのではないであろうか。確かに、物質代謝の攪乱・亀裂が問題になり、それを解決するためにもエコロジー革命＝未来社会が求められるとしても、狩猟採集時代において、狩られる存在として生態系の最下部に位置していた人類が狩るヒトとなり、1 万年前に農業や牧畜を開始し、300 年前に産業社会＝資本主義社会になったのも物質代謝様式の矛盾が原動力となったのであろうか。疑問が残るのである。

マルクスとエンゲルスは、唯物史観に行きついた『ドイツ・イデオロギー』（1845～6 年）において、その歴史観を「この歴史観はつぎの点にもとづいている。すなわち現実的な生産過程を、しかも直接的な生活の物質的生産から出発して展開すること。そしてこの生産様式とつながっていて、これによってうみだされるところの交通形態を、したがって種々の段階における市民社会を全歴史の基礎としてつかむこと。さらにこの市民社会を国家としてのその活動において叙述するとともに、意識の種々な理論的所産および形態、すなわち宗教、哲学、道徳などなどをすべて市民社会から説明し、そしてそれらのものの発生過程を市民社会の種々の段階からあとづけること」^⑤と規定したが、この歴史観は、『経済学批判』（1857 年）の「序言」の定式と同趣旨のものである。この歴史観には、確かに自然生態系への着眼の要素は示されていないが、尾関氏も言うように、土壌の枯渇に警鐘を鳴らしたリービッヒ

の影響を受けて、『資本論』執筆に際し、労働者の健康と肉体を破壊する資本主義的生産による人間と自然の物質代謝の攪乱、亀裂を告発する見地を見いだしたのである。

マルクスが『資本論』で「物質代謝」概念を用いた用例は、夙に吉田文和『環境と技術の経済学——人間と自然の物質代謝の理論』(1980年)において整理されているように、「①商品の交換(使用価値の転換)としての Stoffwechsel (質料転換) [商品の交換・流通としての社会的物質代謝]、②化学変化としての Stoffwechsel (物質変換) [錆や腐食などの自然的物質代謝]、③人間と自然のあいだの物質代謝としての Stoffwechsel [労働による自然素材の変化・加工]」^⑥である。マルクスは、『資本論』で「Stoffwechsel (物質代謝)」を第1巻で19回、第2巻で6回、第3巻で6回、合わせて31回使用しているが、その内訳は、②は2回、③は10回で、それ以外はすべて①の社会的物質代謝である。因みに、『経済学批判』(1857年)では22回すべてが社会的物質代謝である。

吉田氏は、この三種類の物質代謝概念の関係を、「②の化学変化を示す Stoffwechsel(物質代謝)は化学的運動形態であり、三者のうちでは最も低次のものである。③の人間が自然から物質を取得し生産・消費の廃棄物を自然に排出することを示す「人間と自然とのあいだの Stoffwechsel(物質代謝)」は、人間の生命の基本的条件であり、①の商品の転換、使用価値の転換を示す社会的 Stoffwechsel(物質代謝)は、人間の社会生活の不可欠な条件である」(吉田、45-46)と階層的に捉えている。

ただ、ここで注意しなければならないのは、吉田氏はその前年に発表していた「マルクスの Stoffwechsel 論」^⑦において、この三種類すべての Stoffwechsel は、「物質代謝」ではなく「物質変換」と訳すべきであるとしていた。^⑧「物質代謝」は、本来、生物学に限定された用語であり、とりわけ社会的 Stoffwechsel を「社会的物質代謝」と訳するのは、不適切であると指摘していたのである。①の W-G-W は、交換・流通過程において、商品と貨幣の形態変換(Formwechsel)と対になっているからである。③「人間と自然のあいだの Stoffwechsel」についても、『資本論』における用例は、「労働は、まず第一に人間と自然とのあいだの一過程である」(『資本論』I,S.192)というように、人間の「労働」に関して述べられたものが半数で、「物質代謝の攪乱・亀裂」といったエコロジカルな意味での「人間と自然の物質代謝」は、5箇所のみである。もちろん、このエコロジカルな意味が重要であるし、そのことは私自身も重視したいし、これがマルクスの今日的な炯眼を示すことはいくら強調してもし過ぎることはないことは確かである。

「物質代謝の攪乱」ということと言えば、市場経済社会における商品の交換・流通の停滞や攪乱である富の偏在と貧困、不況や恐慌がそれにあたるであろう。マルクスは、社会的物質代謝の攪乱と人間と自然との物質代謝の攪乱をなくし、「社会的生産の規制的法則として、また人間の十分な発展に適合する形態で、体系的に確立すること」(『資本論』I,S.528)を求めたのである。

4. 「ホメオスタシス(恒常性)」概念の社会理論への拡大に対する疑念

尾関氏は、「マルクスが「物質代謝」概念を社会的次元にまで拡大したように、……「ホメオスタシス」概念を社会的主体とのかかわりにおいて社会理論に導入」(131)することを提起する。

「ホメオスタシス」は、「生物体の体内諸器官が、外部環境（気温・湿度など）の変化や主体的条件の変化（姿勢・運動など）に応じて、統一的・合目的に体内環境（体温・血流量・血液成分など）を、ある一定範囲に保っている状態、および機能。恒常性」（広辞苑）ということであるが、尾関氏は、神経科学者ダマシオの唱える「生命を最適化し、未来に向けて発達する余剰が最も得られやすい安定状態へと自然に向かう」⁹⁾ (132)という「ホメオスタシス」の捉え方に着目する。

ダマシオは、ホメオスタシスが「進化を通じて生物、特に動物に神経組織の発達をもたらし、中枢神経系、脳を生みだし、……哺乳類の意識や心の原初形態、さらには人間に精神や自己意識をもたらした」(133)と唱えるのであるが、尾関氏は、「生命体の起源に発するホメオスタシスが認知と情報伝達的能力を段階的に発展させてきて、人間の社会レベルでもそれにふさわしい次元の認知と情報伝達の集成的意識としてのホメオスタシスが働いていて、集団的協力に基づいて環境適応的に社会の維持をはかりつつ同時に未来に向けて発展していく」(135)とし、人間の歴史についても、「人間の歴史は、根底において人間社会の物質代謝を通じてのホメオスタシスが実現していく過程である……生産力の発展やその生産関係との矛盾もこの根源的過程を前提において考え、展開されることが重要である」(135)と言って、「ホメオスタシス史観」とでも言うべき説を提唱するのであるが、どうであろうか。

ダマシオは、生物のもつホメオスタシスの働きが、単に「生命の維持」にかかわるだけでなく、「生命の繁栄」にもかかわり、「単に生存のみならず、繁栄を享受し、生命組織としての、また生物種としての未来へ向けて自己を発展させられるよう生命作用が調節されることを保証する」(ダマシオ、38)こと、たとえ思考や意思を欠いた段階でも、「あらゆる細胞は無事に生き続けていくための断固とした「意図」らしきものをつねに示して」(ダマシオ、49) いること、そしてこのホメオスタシスは「スピノザのコナトゥス（固持努力）に対応する」(ダマシオ、50) と言う。

スピノザは、「いかなるものでも、自己の存在に固執しようと努力(*conor*)する」(『エティカ』第3部定理6)と言い、この「コナトゥスは、その事物自身の現実的本質(*actualis essentia*)に他ならない」(同、第3部定理7) と言って、このコナトゥスが精神とかかかわると「意志(*voluntas*)」と呼ばれ、「衝動(*appetitus*)」、「欲望(*cupiditas*)」であり、喜びと悲しみをコナトゥスの増大と減少と捉えて、「喜びと悲しみは、各個人之力、あるいは自分の存在に固執しようとする努力が増大あるいは減少し、また促されあるいは抑えられるような受動のことである。」(同、第3部定理57 証明) であると言う。すべての存在は、生物も無生物も、このコナトゥスの働きに基づいて存在するのである。

ダマシオのホメオスタシスは、スピノザと違って無生物は対象外であるが、すべての生物は、このコナトゥスと同様に、その存在に固執し、意識のあるなしにかかわらずその存在のあり方を拡大しようとするのである。そこで尾関氏は、このダマシオの唱えるホメオスタシスに注目して、それが人類史を推進する原動力になっていると言うのであるが、どうであろうか。確かに人類の歴史は、人間の「努力」に基づいて展開されてきたことは確かであるが、この努力がどのように発揮されてきたか、どのように展開されてきたかの説明が問われているのであるが、ホメオスタシスでは、それに答えられないのではないだろうか。

5. 農業は「小農」でなければならないのか

尾関氏は、本書において、農業、とりわけ「小農」の存在意義を高く評価しようとする。尾関氏は、従来のマルクス主義が小農を「プチ・ブルジョア」の典型で前近代の遺物で滅びゆくものと位置づける「小農没落必然論」を唱えたが、現代において農業のもつ環境や景観、地域文化などの多面的価値（機能）を守る重要な担い手として「小農」を重視する必要があるとその認識の見直しを主張し、国連が2014年を「国際家族農業年」とし、2018年における総会において「小農の権利宣言」を可決したことに注意を喚起する。そして、エンゲルスが「小農没落史観」に最後まで拘ったのに対して、マルクスはむしろ小農や小経営を高く評価していたとその見直しを求める。

尾関氏が、マルクスの小農評価の典拠としているのは、『資本論』第1巻の次の文章である。

労働者が自分の生産手段を私有しているということは小経営の基礎であり、小経営は、社会的生産と労働者自身の自由な個性との発展のために必要な一つの条件である。たしかに、この生産様式は、奴隷制や農奴制やその他の隷属的諸関係の内部でも存在する。しかし、それが繁栄し、十分な典型的形態を獲得するのは、ただ、労働者が自分の取り扱う労働条件の自由な私有者である場合、すなわち農民は自分が耕す畑の、手工業者は彼が老練な腕で使いこなす用具の、自由な私有者である場合だけである。」
(『資本論』I,S.789)(186)

マルクスは、この文章に続いて、この小経営、小農の生産様式が滅ぼされて、土地や労働用具が収奪されて資本の本源的蓄積が行われ、資本主義的生産様式が展開されるようになるが、この資本主義が打ち倒されて、否定の否定として「資本主義時代の成果を基礎とする個人的所有をつくりだす。すなわち、協業と土地の共同占有と労働そのものによって生産される生産手段の共同占有とを基礎とする個人的所有をつくりだす」(『資本論』I,S.791)展望について語っている。

と同時に、よく知られているように、マルクスは「ザスーリチへの手紙 草稿」で、この資本による本源的蓄積、直接的生産者と土地・労働手段との分離が行われたのは、「イギリスにおいてだけである。……だが、西ヨーロッパの他のすべての国も、これと同一の運動を通過する」(『資本論』フランス語版)(MEW19S.384)と言って、この本源的蓄積を西ヨーロッパ諸国に限定していたこと、ロシアその他の地域では、原古的〔archaique〕な土地共同体、土地の共同所有が継続していたこと、そして西ヨーロッパの資本主義的な近代社会と同時的に存在しているロシアが直接的生産者の土地や労働手段との分離を経由しなくても資本主義の成果を取り入れて、共同社会に至ることができるという見通しを語った。

尾関氏は、このマルクスの見通しを高く評価し、「協業と土地の共同占有と労働そのものによって生産される生産手段の共同占有を基礎とする個人的所有」(『資本論』I,S.791)の実現と小農の存在を結合し、小農を重視する。そして、「個人的—共同的所有」の二つの種類として、労働者協同組合と小農の集合による生産協同組合を「労農アソシエーション」と位置づけて未来社会を展望しようとする。

この展望については私も共感するところであるが、ただ、マルクスは、「ザスーリチへの手紙 草稿」でロシアの共産主義社会の展開について「土地の共同所有は、<それが西洋の資本主義的生産と同時的に存在し、それと物質的ならびに知的な諸関係を結んでいること

とあいまって>ロシアが個人主義的な分割地農業を直接かつ徐々に集団的農業に転化してゆくことを、可能にしている。そしてロシアの農民は、すでに集団的農業を共有の草地で実行している。ロシアの土地の地勢が大規模な機械制耕作をうながしており、農民がアルテリ契約に慣れていることは、彼らが分割労働から共同労働に移行するのを容易にしている」(MEW19S.389)と云って、小農としての分割地農業を集団化して、大規模な機械制耕作の発展を展望しているのである。したがって、マルクスは、小農のままでよいとは言っていないのである。

尾関氏は、環境問題とのかかわりで、「大規模化された農業が自然と人間の物質代謝の亀裂、攪乱をもたらす懸念があるのに対し、小農は、環境保全的可能性が高い」(189)と、大規模農業が環境破壊に結びつき、小農が環境保全的であるとして小農を推奨するのであるが、どうであろうか。

確かにマルクスは、「大工業と、工業的に経営される大農業とは、いっしょに作用する。元来この二つのものを分け隔てているものは、前者はより多く労働力を、したがってまた人間の自然力を荒廃させ破滅させるが、後者はより多く直接に土地の自然力を荒廃させ破滅させるということだとすれば、その後の進展の途上では両者は互いに手を握り合うのである。なぜならば、農村でも工業的体制が労働者を無力にすると同時に、工業や商業はまた農業に土地を疲弊させる手段を供給するからである」(『資本論』Ⅲb, S.821)と云って、大農業が土地の自然力を荒廃破滅させると批判しているが、それは資本主義的な大農業であって、「ザスーリチへの手紙」でも触れたように「大農業一般」を否定しているのではない。問題は、「物質代謝を合理的に規制する」(『資本論』ⅢbS. 828)ことが重要なのである。

酒井惇一氏は、『農業資源経済論』(農林統計協会、1995年)⁽¹⁰⁾で、農業の工業化について、「もし農業の工業化が機械化、化学化の進展であるとするならそれでいいのではなからうか。それは農業の苦役的労働からの脱却を可能にするものだからである。またそれは人間労働のできなかつたことを可能にする。たとえばトラクターは深耕を可能にし、化学化は内給的地力維持の限界を克服して単収を高める。その結果より少ない労働で安定して豊かな食糧の供給が可能となる。また機械化は農地開発も可能にして資源の利用度を高め、食糧不足を解決する。つまり機械化、科学化は大きな社会進歩なのである」(酒井、75)とその推進を推奨し、問題は農業の資本主義化からくる歪みであると言う。

酒井氏は、「家族経営＝環境保全的経営論」を批判する。「大規模農業・企業的農業＝農薬・化学肥料多投型」「小規模農業・家族農業＝資源・環境保全型」として、「資源・環境問題の原因を規模問題、企業形態問題に単純化していいのか」(酒井、254-255)と問う。

酒井氏は、家族経営が環境保全的性格をもつとする論者は、「①家族経営が祖先から子孫へと引き継ぐ生業なので、農業の持続を困難にするような環境破壊などするわけではなく、地力維持を考える等、長期的視点にたって経営する性格をそもそももっている、②家族労働力を基礎としていることが資源・環境保全を可能にする、すなわち、家族経営はその基礎とする家族労働力を費用とは考えず、したがって、企業経営のように労賃節約のために農薬や化学肥料を使って利益をあげようなどとは考えない、③大規模経営は大面積をいかに効率的に経営するかを考えるので化学肥料や農薬を大量に使い、また労力に対して土地が相対的に多いので外給的地力維持、粗放的にならざるを得ず、単作や連作を進めるが、これに対して家族経営は、少ない土地から多くの収量を得なければならないので、土地を大事に扱い、

輪作体系の導入等の地力維持を考え、土地に対して労力が相対的に多いことからそうしたきめの細かい管理が可能である、④家族経営はそもそも自給生産を基本としており、しかも小規模のために現金収入が少なく、現金支出をいかに少なくするかを考えるので、経営内自給に力を入れる結果、多角的生産となるので単一経営のように農薬や化学肥料の多投をしなくともすむ、⑤いままでのべたこととも関連しているのであるが、経営と労働と土地所有と生活を一体化しており、経営者自ら労働するので農薬等の健康に害のあるようなものは使わず、家族経営は一般に農地所有者であるので、農地の管理に力を入れ、地力維持に力を注ぐ。さらに、生産物を自分の家で食べるので健康を害するような農薬は散布しない」（酒井、255-256）と言い、以上のことから、「小規模家族経営は環境保全型経営であり、持続的農業にふさわしい経営形態であるという。しかし本当にそうなのだろうか」（酒井、256）と問う。

酒井氏によると、自給自足を基本とし、労働市場も開かれていなかったかつての家族経営は資源・環境保全的経営であり、「自分の代だけでなく子々孫々まで農業が継続できるように長期的視点にたって資源と環境の保全を考える」（酒井、256）農業経営であったが、商品経済浸透下では、資本主義経済に巻きこまれ、「生産資材や生活資材を外部から調達することなしには経営も生活も維持できなくなってくる。そしてその調達のために農産物を商品として販売せざるを得なくなる。つまり自給自足経済から商品経済へと転換する」（酒井、257）。その結果、効率性、経済性、利便性を追求せざるを得なくなり、資本主義的企業と基本的には同じ行動原理をもたざるを得なくなり、資源を多く消費し、環境負荷を増大させるようになってくる」（酒井、258）のであり、それに拍車をかけるのが家族経営の性格であると、次のように言う。

第一に、小規模生産という家族経営の性格から単年度効率追求主義になりがちである。小規模なるがゆえの経済的ゆとりのなさから、将来を考えるより今どう生きるか、生計費を得るためにかぎられた土地からいかに多くの所得を得るかを考えざるを得ない。そのために化学肥料や農薬を多投しがちになり、また土地を酷使する。

第二に、小規模なるがゆえに経営の専門化、単一化を進めざるを得ないことである。たとえば、いかに地力維持のために輪作体系をとることが必要だといっても、副作物の収益性が低ければ取り入れられない。若干収益が下がっても長期安定的な効率を追求するなどはなかなかできないのである。それでもって有利な作物に集中して経営と生活を維持しようとする。その結果土地が専作的に利用され、地力問題が引き起こされ、化学肥料や農薬が多投されることになる。

第三に、孤立分散的、自己完結的な小規模生産なるがゆえの資源浪費、それにともなう環境汚染物質の放出の増加が避けられないということである。

たとえば、家族経営は機械・施設の要求する適正規模をもたないので土地面積に対して機械・施設を余分に投入する。その結果、鉱物や石油等の資源が農作業に本来必要とされる以上に費消され、それはまた窒素酸化物や二酸化炭素等を余分に排出させて環境に悪影響を及ぼす。それに加えて、機械を適性台数以上に工業部門で生産させることにより、その生産過程での資源の浪費と余分な廃棄物の排出をもたらす。

第四に、家族経営の経営感覚の弱さが資源・環境問題に拍車をかける。

そもそも小規模経済であり、経営と生活が一体化している家族経営はコスト意識が低

い。まず厳密な財務管理などは難しい。また小規模なので記帳などしなくとも何とか経営していける。それで生産技術、生活技術に対する関心は強いが、財務管理等の経営技術に対する関心は相対的に薄い。実際に簿記記帳している農家は少ない。その結果生産資材の過剰投入となる。

しかも家族経営は、生産の絶対量を追求し、コストとの関連をあまり考えない傾向をもつ。

こうした絶対収量追求は、かつての低位生産力段階、自給自足時代の名残からくる。要するに家族経営は商品経済に対応した収益性追求に純粹化していないのである」(酒井、258-260)

酒井氏は、このように家族経営が、商品経済の浸透によって「資源・環境問題を引き起こすようになり、しかも商品経済と生産力高度化に十分に対応できる性格をもっていないために問題を増幅させる」(酒井、260)と指摘する。

これに対し、大規模・企業経営型農業は、次のような利点があると言う。

スケールメリットで生産資材を節減し、きびしいコスト管理による私経済的費用の節減と最適投入量の追求で生産資材の使用を節減し、省資源と環境汚染物質の放出の抑制を可能とする。

また、大規模に経営していることから合理的な複合化を採用しようと思えばできる。経営面積の大きさと土地面積あたり収益の低さを補えるので、土地純収益の低い農作物を入れた合理的輪作体系をとったり、収益性の低い家畜でもそれを導入して堆肥生産をしたりすることができるのである。また、一作物集中による季節的繁閑の差を避けて雇用労力の完全燃焼を図るために輪作体系をとったり、畜産を導入したりすることもある。大規模企業経営＝単一化＝地力喪失という単純なストーリーには必ずしもならないのである。(酒井、264)

もちろん、酒井氏は、「アメリカの企業農場などは、大量の化学肥料、農薬、水を使用し、土壌浸食、水源枯渇、生態系破壊をもたらしている」(酒井、264)として、大規模企業農業の問題点も指摘しているが、だからといって、「家族経営が善であるなどとは単純にいえぬ」(酒井、265)と言い、「問題解決の基本は、旧来の家族経営にもどすことではなく、資本主義経済とそれに規定された政治と社会的な意識を変革することなのである」(酒井、265-266)と指摘する。

この酒井氏の指摘は、資本主義市場経済下の日本の農業のあり方についてのものであって、共産主義的な未来社会での農業のあり方についてではないが、それを考えるうえでも、考慮に値するものであると思うのである。

おわりに

以上、尾関周二氏の『21世紀の変革思想へ向けて——環境・農・デジタルの視点から——』について、私の疑問点を5点にわたって述べてきたが、尾関氏にすれば、この疑問点が本書における氏の本筋の議論に触れずに、その周辺や脇にある問題であることやまた私の無理解に起因することであったりして、不本意なものであるかもしれない。実際、本書は、われ

われが直面する「21 世紀」の問題とその打開・変革を提起する氏の「畢生の書」であることから、それにケチを付けるようなことになって申し訳ないと思っている。「脱資本主義と将来社会へむけて」日本を国際連帯国家とし、新自由主義的グローバリズムに対して国際立憲主義にもとづく地球的ガバナンスの確立の提案など、21 世紀の変革思想に向けての氏の王道の主張は、もちろん私もその大筋で賛同していることを申し添えたい。

注

- (1)尾関周二『21 世紀の変革思想に向けて—環境・農・デジタルの視点から—』本の泉社、2021 年。なお、本書からの引用は、本文中にアラビア数字で記す。また、マルクスなど他の著者からの引用についても、その引用文が本書でも引用されている場合は、本書の引用箇所の日をも併せて数字で記す。
- (2)ローリー・グルーエン『動物倫理入門』河島基弘訳、大月書店、2015 年、p.65-66
- (3)Ted Benton, *Natural Relations: Ecology, Animal Rights and Social Justice*, London:Verso, 1993 の第 2 章 'Marx on Humans and Animals:Humanism or Naturalism' (山口拓美訳「マルクスの人間論と動物論——人間主義か自然主義か——」『神奈川大学商経論叢』51(1)、p.119
- (4)斎藤幸平『『資本論』のエコロジーから考える——マルクスとエンゲルスの知的関係』『季刊 経済理論』第 53 巻第 4 号 2017.1、p.42
- (5)マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳、岩波文庫、p.51
- (6)吉田文和『環境と技術の経済学——人間と自然の物質代謝の理論』青木書店、1980 年、pp.42-44。〔 〕内は河野。
- (7)吉田文和「マルクスの Stoffwechsel 論」『北海道大学 経済学研究』29(2)、1979 年、pp.139-158
- (8)なぜ吉田氏が『環境と技術の経済学』でこの「物質変換」を「物質代謝」としたのかは、不明であり、この点は、小松善雄氏も「マルクスの物質代謝論」(立教経済学研究 第 54 巻第 4 号、2001 年、pp.155-183)で指摘している。
- (9)アントニオ・ダマシオ『進化の意外な順序——感情、意識、創造性と文化の起源——』高橋洋訳、白揚社、2019 年、p.48
- (10)酒井惇一『農業資源経済論』農林統計協会、1995 年

(このの かつひこ・京都産業大学名誉教授・哲学)